

普及活動に役立つ研修の実施

今回は、本ミニシリーズの最終回として、前号で紹介した「仮想技術普及会議」のロールプレイの様子と、その準備過程で得られた成果などについて述べてみたい。

「仮想技術普及会議」でのロールプレイ

仮想技術普及会議を始める際は、研修の目的と会議の進め方について、まず以下のような説明を研修員に行った。

「この研修では、研修員が2つのグループに分かれ、確立された技術を伝える側と、それを普及する側の役割を交互に演じるロールプレイ手法で発表と質疑応答を行い、普及活動に関する知見を得ることを目的とする。仮想会議の場面設定は、『A県の試験場で普及に移せる技術が確立され、技術普及会議を通じて各地域の普及員に具体的な活動を始めてもらうことになった』という状況である。」

会議は90分の予定で行った。最初のグループの想定普及技術はスイカの整枝法である。発表会場にお茶やお菓子を準備し、発表概要や普及する整枝法を容易に理解させるための図などを載せた資料を配付したうえで、マルチプロジェクターを使って発表を行った。普及活動の中で、紹介する技術の特徴や従来手法との違い、経済的メリットなどの農民から聞かれそうな想定質問については、発表の評価シートに項目を記述することで対応した。いっぽう、2番目のグループは、パレイショの栽植密度を想定普及技術とした。資料を配布せず、発表概要や技術を適用した結果を大きく書き出した模造紙を黒板に貼って発表を行った。このうち、パレイショの栽植密度を変えることで収穫イモの大きさ分布が変わることを色別で表示した図は、一目で良く分かり、発表を聞きながら内容が把握し易いように配慮されていた。

2つのグループの発表は、異なる普及手法を用いて試みられたが、どちらも仮想の場面設定を踏まえ、受け手側の普及員が理解し易いよう伝え方を工夫していた。また、殆どの研修員が実際に普及業務をしているためか、発表者が伝え切れていない情報を引き出し、発表内容を高めようと発表者と普及員の役割をうまく演じ分けることもできていた。

仮想技術普及会議までの準備を通して得られたこと

野菜栽培技術研修では、適正技術の改善・導入についての検証作業は試験研究を通じて行うことを指導しているが、改善された技術普及の活動については、各研修員に委ねているのが現状である。研修員の帰国後、研修指導

側が彼らの自国での業務に直接関与できない状況で、いかに活動してもらうかが日々の悩みの種であった。そうしたなかで、研修には普及員が多く参加していることから、彼らの知見を生かして普及活動のアイデアを共有することが出来れば、帰国後にも役立つものと考え、小グループによる準備ミーティングとロールプレイを用いた仮想技術普及会議を研修プログラムの一つとして実施を試みた。この研修プログラムを行うにあたり、研修指導側は、プログラムの過程と発表のロールプレイを研修員がイメージできるよう、研修目的と実施手順を研修員に十分理解させる必要があった。幸い、各研修員が同様の普及経験を持っていたことで、スムーズにプログラムの手順を進めることができた。

ミーティングの様子から、グループの人数は5名前後が適当と思われた。既に普及業務に携わっている研修員の知識や経験を引き出し、他の研修員にそれらを共有させるための研修指導側の姿勢としては、聞き役に回ること、

グループミーティングではメンバー全員が話す機会を作り出し、遠慮無く意見を出せるようにすること、初回ミーティングでは研修指導側の都合による時間制限を行わず、お互いに敬意を払って相手の意見を聞かせるようにすること、などが大切であった。また、ミーティングの2回目以降では、自然とグループリーダーが出てきてミーティングの進行を任せられるようになったが、グループの考えが声の大きい人の意見に左右されないよう、研修指導側が背後で話し合いを見守り、合意のとれたものに誘導することも必要であった。また、どのような手法を用いて発表するのかを研修員自身に考えさせ、具体的な準備をさせるためには、多様な経験に基づく臨機応変な判断も必要であると思われた。小グループによるミーティングを採り入れた今回の研修では、話し合いでメンバー同士の考えが分かるとともに、発表資料の準備のなかで、技術表現について理解不足のメンバーに説明したり、遅れている作業を積極的に手伝ったりする姿がみられ、作業チームごとの一体感が生まれた。こうした研修方法は、講義の様に一方的な情報を与える手法に比べ、現場経験のある当研修員を対象としたものに有効であることが示唆された。



資料配布



2番目の発表